

詩集日本漢詩

棕隱軒集
鴨東四時雜詞
行庵詩草

稻川詩草
柳灣漁唱

汲古書院刊

富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

詩集日本漢詩

第十二卷

詩集 日本漢詩 第十二卷(第一期第十回配本)

昭和六十二年四月 発行

定価八、五〇〇円

富士川 英郎

編者 松下 忠

佐野 正巳

解題 富士川 英郎

発行者 坂本 健彦

印刷 モリモト印刷株式会社

発行 汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋二一五―四

電話(二六五)元六四 振替東京五二五〇三五

©一九八七

解題

富士川英郎

棕隠軒集

著者

中島棕隠（一七七九—一八五五）、名は規、または徳規、字は景寛、通称は文吉。棕隠、棕軒、道華庵、画餅居士、因果道士、安穴道人と号した。安永八年に京都に生まれたが、父泰志は儒者であった。棕隠は十一歳のとき伴蒿蹊の門に入って、国学を収め、十八、九歳の頃から村瀬栲亭に儒学を学んだ。文化の初め、江戸に出て、根津や不忍池の畔に十年近く住んでいたが、文化十一年に京都へ戻ってからは、文人として華やかな活動をはじめた。彼は多芸多才で、漢詩のほかに、安穴道人の名で狂詩もつくり、和歌も詠じ、さらに「京の四季」という端唄までも作って、当時、その才名をひろくうたわれたのであった。文政から天保へかけての頃、京阪地方で人々の口の端にのぼっていた歌に

富は弼、詩は山陽に、書は貫名、猪飼経書に、粹は文吉

というのがあり、冒頭の「弼」は大坂の儒者篠崎小竹、「山陽」はもちろん頼山陽、「貫名」は貫名海屋、「猪飼」は猪飼敬所であるが、最後の「粹は文吉」の「文吉」は棕隠の通称であり、これを以てしてもその当時、棕隠が儒者仲間での粹人、もしくは通人として聞えていたことが知られるだろう。彼は晩年にはしばしば諸方を遊歴したが、安政二年に京都で、七十七歳を以て歿した。その著書には、『棕隠軒集』と『鴨東四時雜詞』のほかに、『金帚集』『水流雲在

楼集』『都繁昌記』『太平新曲』『太平二曲』『太平三曲』その他多数ある。

なお、森銑三氏に「好事儒者中島棕隠」（『森銑三著作集・第二巻』所収）という詳しい伝記がある。

内容その他

初集から四集まであり、各集上下二巻から成っているので、全部で八冊ある。

初集は文政八年に刊行された。古今体詩三百六十首を収めているが、編年体ではないので、箇々の詩の制作された年代を詳らかにすることは難い。ただ、時たま、その発生の時を明記した詩があるので、それによってみれば、棕隠が江戸に滞在していた頃（文化三―十一年）の作から文政四年頃までのそれに及んでいるようである。

二集は文政十一年に刊行され、古今体四百十余首を収めているが、凡そ文化二年から文政三年頃までの詩が集められている。

三集は文政十三年に刊行され、古今体四百余首を収めているが、その詩は凡そ文政三年から同九年頃までの作に及んでいる。

四集には奥付がなく、その刊行の年月を詳かにしないが、天保二、三年頃の出版であろうか。古今体四百余首を収め、凡そ文政九年から同十二年に至る作が集められている。

書誌

使用底本 故長澤規矩也先生蔵本 初集―四集各二巻大八冊 初集は縹色表紙。題簽は左肩に四周双辺の摺題簽「棕隠軒初集 上」（第一冊）。見返は香色紙で「棕隠軒初集」。文政七年の自序あり。奥付は二集嗣出の予告に続いて「文政八年乙酉孟春上澣」、林権兵衛、野田嘉助、堺屋伊兵衛の京都書肆名があり、堺屋伊兵衛の下に朱印押捺。

二集から四集までそれぞれ封面書名があり、四集には左下に「陽氏藏板」とある。二集奥付は三集嗣出の予告と「文政十一年戊子孟春上澣」とあり、書林名は京都の林権兵衛が大坂の河内屋儀助に代り京都の野田嘉助が橘屋嘉助に代っている。野田と橘屋は同一人物かどうか不明だが住所は同じである。三集は初集から三集の広告と四集五集の嗣出を予告（五行）の後に「文政十三年庚寅孟春上澣」とあり、書林は堺屋伊兵衛一名になっている。四集には奥付はない。初集二集に補修がある。初集上巻十七丁裏六行十五字目の「浅」は「尙」が改められた。八行目下の「掬體」の二文字は入れ木され、頭書が加えられている。二集下巻三十二丁表一行目の注字中の「伯宜」は墨丁であったものを入れ木修正してある。初集—三集52%、四集53%縮小。

諸本

一、内閣文庫本 206/302 初集二卷大二冊 浅葱色表紙で見返は使用底本と同じであるが黄色紙を使用。奥付は使用底本と同じ。摺の状態が良い。初集の十七丁裏には頭書がなく「残」は「尙」となっており、「掬體」の入れ木はない。補刻以前の刊行である。

二、慶応義塾図書館本(A) 151/84 初集二卷大二冊 茶色表紙。題簽は左肩に墨筆「棕隠軒初集 上」(第一冊)。見返は紅色紙使用で使用底本と同版。奥付は使用底本と同じだが堺屋伊兵衛の下に朱印はない。内閣文庫本と同様、訂正以前の刊行本である。

三、慶応義塾図書館本(B) 151/85 二集二卷大二冊 浅葱色表紙。題簽、見返、奥付とも使用底本と同じ。下巻三十丁一行目の注字双行に墨丁が二ヶ所あり「伯宜」に訂正される以前の出版である。

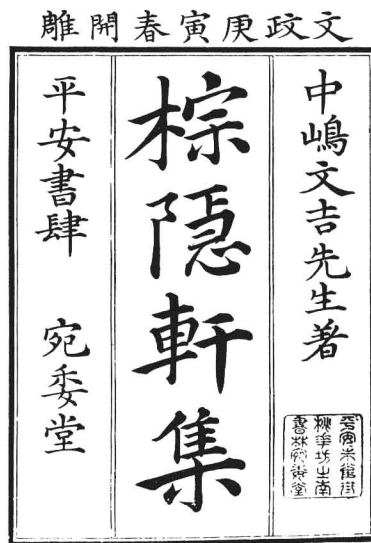
四、慶応義塾図書館本(C) 151/86 三集二卷大二冊 茶色表紙。見返は香色紙使用で使用底本と同版。雁皮と楮とを交漉した上質の紙を用いている。上冊見返の左下に「棕隠」(陰刻方印)の朱印がある。奥付はない。印面も非常に美しく初印本と思われる。

五、国会図書館鵜軒文庫本 詩文 2258 初集―三集各二卷大六冊 浅葱色表紙。見返は初集黄色紙、二集無地紙、三集

淡小豆色紙使用で版は使用底本と同版。奥付は各集使用底本と同じ。初集二集は補修以前の状態である。

六、国会図書館本 231/109 初集―三集各二卷大三冊 淡縹色の元表紙がついていて、各集ごとに帝国図書館名が空押された茶色の表紙に合綴されている。見返、奥付等、鵜軒文庫本と同じ。初集二集とも後修本。

七、静嘉堂文庫本 54/58 初集―三集各二卷大六冊 浅葱色表紙。題簽は双辺の摺題簽だが異版「棕隠軒初集 上冊」(第一冊)。見返は香色紙、四周双辺、欄上に「文政庚寅春開雕」とあり「中嶋文吉先生著／棕隠軒集／平安書肆 宛委堂」著者名の下に宛委堂の朱印押捺。



序文の次に中扉「棕隠軒初集」があり、これは使用底本の見返と同版である。初集二集に奥付はない。三集は使用底本と同じ。後修本。

八、慶応義塾図書館本(D) 151/104 初集―四集各二卷大八冊 浅葱色表紙。題簽は使用底本と同じ。初集は静嘉堂本と同じ宛委堂の見返。奥付は初集二集にはないが二集上の後表紙見返に「説文字母集解」の広告の後、「京師書肆三条通柳馬場東角 尚書堂主人謹誌」とあり、二集下の後表紙見返に「艶道通鑑」の広告の後、「京都書林 三条

通柳馬場東へ入角 堺屋仁兵衛」とある。尚書堂と堺屋は同一人物である。三集、四集は使用底本と同じ。初集二集は後修本。この補刻は三集まで揃えて出版した際に補刻したと推定される。

九、富士川英郎蔵本 初集二集各二巻大四冊 縹色表紙。初集二集とも、題簽、見返、奥付等使用底本と同じ。初集は補刻以前の刊行本であり、二集は後修本である。

鴨東四時雜詞

著 者

中島棕隠（前出）。

内容その他

江戸時代の竹枝は祇園南海の『江南竹枝』あたりを先駆として、市河寛齋の『北里歌』や、菊池五山の『深川竹枝』などがあつたが、やがてそれらに影響されて現われたさまじまの竹枝のうち、この棕隠の『鴨東四時雜詞』は最も出色のものであり、最も人口に膾炙したものであると言ふことができるだろう。

『鴨東四時雜詞』は読んで字の如く、鴨東、即ち京都の祇園を中心としたあたりの風俗を歌った竹枝を集めたものであるが、これらの竹枝のうちの或るものを棕隠はかなり早くから作っていたらしい。例えば菊池五山がその『五山堂詩話』巻四のなかで、「島棕軒の鴨東雜咏二十首の詩は清婉を極む。継ぐ者有りと雖も、竟に其の右に出ずること能わず」と言つて、推称した一連の竹枝は、おそらく棕隠が文化三年に江戸に移住する以前に、京都で作られたのだろう。棕隠はそれらの竹枝六十五首を集めて、『鴨東四時詞』と題して、文化十一年に刊行した。筆者は、残念ながら、まだ

この詩集を見たことがないが、これはのちの『鴨東四時雜詞』の初版と見るべきだろう。

『鴨東四時雜詞』はこの初版を増補修正したもので、収録された竹枝も百二十首と、初版に比して、ほぼ倍増している。そして文政九年に執筆された峨眉山人の序と、文化十三年執筆の田能村竹田の序、文化十一年執筆の古漁鷗史の序を巻頭に掲げているが、峨眉山人とは誰なのか、森銑三氏はその「好事儒者中島棕隠」のなかで、「峨眉山人といふのは何人であったか、知ることを得ないが、或はそれは烏有子で、棕隠自らその文を草したのではなかったかとも思はれる」と言っている。

この詩集には百二十首の七言絶句が収められているばかりでなく、それらの詩の一つひとつに、散文で書かれたかなり詳しい注記が付いているので、この詩集は単なる竹枝集にとどまらず、立派な鴨東地誌とでも言うべきものとなっている。いずれにしても、この詩集は江戸末期に最もひろく読まれた詩集の一つで、やがてこれに倣って、大坂在住の詩人たちの竹枝を集めた『浪華四時雜詞』をはじめとして、遠山雲如の『墨水四時雜詠』や寺門静軒の『江頭百詠』など、多くの類書が現われた。さらに明治時代に入って、与謝野晶子の京都の風物を歌った短歌や、吉井勇の『祇園歌集』なども、やはりこの『鴨東四時雜詞』の系統を引いていると言ってもよいだろう。

書誌

使用底本 故長澤規矩也先生蔵本 半一冊 縹色表紙。左肩に三重枠の刷題簽「鴨東四時雜詞」。見返は篆書体で「鴨東四時／雜詞」。文政九年、文化十一年、十三年の序文あり。口絵一丁「鴨東諸勝略図」がある。奥付はない。「蝸角草廬蔵書記」の蔵書印がある。文化十三年序刊本 61%縮小。

諸本

一、国会図書館本 919.5 / N5870 / R 半一冊 縹色表紙。題簽、見返、序文、挿図等使用底本と同じである。奥付はな

い。

二、静嘉堂文庫本 55／26 半一冊 縹色表紙。使用底本と同版。奥付はない。朱点、朱筆書入がある。

三、慶応義塾図書館本(A) 89／282 半一冊 香色絹表紙。題簽は使用底本と同じ。見返は黄色紙使用。使用底本と同版。薄葉紙を用い唐本めかした特製本である。

四、慶応義塾図書館本(B) 114／77 半一冊 縹色表紙。題簽、見返等使用底本と同版。奥付は江戸須原屋茂兵衛から京都大文字屋与三兵衛まで五名の三都書林名があり、大文字屋与兵衛版となっている。

三都	江戸日本橋通壹丁目
	須原屋茂兵衛
發行	大阪心齋橋北久太郎町
	河内屋喜兵衛
書林	同 安堂寺町
	秋田屋太右衛門
	京都寺町通五條上ル
	大文字屋與七
	同 寺町通三條上
	大文字屋與三兵衛版

藏書印は「水野氏図書記」「輔仁会図書記」「佐々木氏藏書印」。

五、富士川英郎藏本 半一冊 縹色表紙。題簽、見返等使用底本と同じ。奥付はない。

行庵詩草

著者

武元登登庵（一七六七—一八一八）、名は正質、字は景文、通称は周平、登登庵、行庵、泛庵と号した。備前国和気郡北方に生まれ、幼にして穎悟、藩校閑谷黌に入つて、神童の名をほしいままにした。長じて詩と書を善くし、諸国を漫遊して、菅茶山、頼春水、頼山陽、田能村竹田らの聞人と親交を結んだ。典型的な文人であつたが、一方、眼科医を志して、蘭方医学の研究に強い関心を示したこともある。但しこれは十分の成果を得なかつたようである。文政元年に京都で歿したが、享年五十二歳であつた。著書に『古詩韻範』『行庵詩草』がある。

内容その他

武元登登庵が文化四年三月五日に岡山を立て、西へ向い、神辺、尾道、広島、赤間関、博多、長崎などに遊んで、菅茶山をはじめとして、さまざまの文人墨客と詩酒微逐した折りの紀行詩を集めたものである。

全部で六巻から成っているが、登登庵は「生涯一片青山」という六字を分つて、各巻の副題としている。この句は、「頻年浪迹与雲随、帰日囊中只有詩、要識行庵何興趣、青山一片是生涯」という、おそらく登登庵自身の詩の最後の句に基づいているのだろう。筆者が所蔵している『行庵詩草生集一』（薇山吟月）の巻末の一枚に、六集の名が列記して

頻年浪迹與雲隨 歸日囊中只有詩					
要識行庵何興趣 青山一片是生涯					
里庵					
生集一	薇山吟月	涯集二	嚴島眠雲	一集三	志馬觀濤
片集四	紫溟弔古	青集五	瓊浦探奇	山集六	泛舟餘興

あり、それを囲んだ左右の両端の枠のなかに、この詩が記されているのである。（前頁図参照）

さて、第一巻に当る「生集」は、「薇山吟月」と題されているが、「薇山」は吉備の山である。菅茶山、源之熙（村瀬栲亭）、田能村竹田の序文について、登登庵の自叙があり、ついで梅山人の画いた挿絵があるが、神田喜一郎氏によれば、梅山人は小原梅坡に相違ないという。小原梅坡、名は正修、字は業夫、通称は大之助。備前藩の世臣で、詩及び書画をよくし、登登庵と親交があった。彼はまた、茶山の『黄葉夕陽村舎詩』の序文も書いている。ところで、この梅山人の画いた絵であるが、これも神田氏によれば、備前の名高い吉備津神社を写したものではあるまいかということである。

「涯集」は「巖陽眠雲」と題され、専ら安芸の巖島を詠んだ詩ばかりを収めているが、巻頭の巖島の絵は浦上春琴が画いたものである。春琴はいまでもなく玉堂の子で、絵をよくした。ついで「奉送登々兄西遊」という茶山の詩が自筆のまま刻されているが、この七言古詩は、『黄葉夕陽村舎詩』巻之八のうちに収められている。

「一集」は「赤馬観濤」と題され、登登庵が巖島からいったん尾道まで帰ったのち、また思い立って赤間関に遊んだときの詩を収めている。巻頭に中林竹洞の赤間関を画いた図があるが、当時の著名な画家竹洞については述べるまでもなからう。尾張の人で、名は成昌、字は伯明、通称を大助といった。竹洞、仲澹、痴翁、大原庵、東山隠士などと号したが、登登庵はこの竹洞といつ識りあったのだろうか。

竹洞の絵については、頼山陽の「登登行庵記」が、その自筆のままで刻されている。登登庵の俗を脱した人柄と、その放浪の生活ぶりを語った興味の深い記である。

「片集」は「紫溟弔古」と題され、赤間関から海を渡って、小倉に至り、さらに箱崎、博多、大宰府、唐津などを歴訪して、詠んだ詩が収められている。巻頭に曲江という人の画いた博多湾の図があるが、曲江のことは詳らかでない。さらに亀井昭陽の執筆した「登登行庵記」が掲げられているが、昭陽は筑前の著名な儒者で、名は昱、字は元鳳、通

称昱太郎であった。彼のこの記を頼山陽のそれと比べて読むと興味が深い。

「青集」は「瓊浦探奇」と題され、登登庵が長崎に滞在していた間の詩が収められている。巻頭の「瓊浦探奇」という題字は、蘭を画いた団扇の絵のなかに、行書で書かれているが、この絵は大西圭斎が画いたのだろう。大西圭斎は、田能村竹田の『竹田莊師友画録』によれば、名は允、字は叔明、圭斎と号し、また、一簑煙客とも号した。中津藩の画員で、江戸に住んでいたという。登登庵とはいっ識りあったのだろうか。

右の題字について、浦上春琴の画いた長崎港の図があり、次に清人江稼圃（こうかほ）の自筆の七言絶句が掲げられている。

最後の「山集」は「泛庵餘興」と題され、登登庵が二年に及ぶその長崎滞在を切り上げて、長崎から平戸、玄海灘を経て、馬関に入り、瀬戸内海を東航して、広島に立寄り、故郷に帰ったまでの間に詠んだ詩が収められている。巻頭に月峯の画いた、登登庵帰航の図が掲げられているが、月峯、名は辰亮、菊澗とも号した。京都の東山双林寺の僧で、絵を池大雅に学び、のちに大雅堂第三世となった。

ところで、この月峯の絵については柳浦の姚静斎（ようせいさい）という清人の題言があり、古賀穀堂の「泛庵記」があり、頼春水の「行庵登登子帰自長崎訪余為語其遊況因賦此以発一噓」と題した七言古詩があり、その子山陽の「登登泛庵記」がある。古賀穀堂は名は燾、字は溥卿、通称は太郎左衛門、有名な古賀精里の長男で、佐賀藩の儒臣であった。

この「山集」の末尾には登登庵の弟君立の跋文が載っているが、武元君立は名は正恒、字は君立、通称は立平で、高林と号した。その父の歿後、家を嗣ぎ、名主となったがのちに閑谷齋の教授となった。

『行庵詩草』は以上のような体裁のものであるが、その外容は粹を尽し、当時の著名な、多くの文人墨客たちの序文や、詩や、記や、絵を、一堂に集めて、華やかな饗宴を演じている、誠に珍奇な詩集であると言うべきだろう。嘗て、「武元登登庵の『行庵詩草』」（『図書』第三四〇号）という詳しい紹介文を書かれた神田喜一郎氏はそのなかで、「文化文政時代に出来た多くの詩集の中で、この『行庵詩草』ほど凝ったものを見たことがない。」と言ひ、また、この詩集

は「いかにも文化文政時代の文人趣味を象徴している。」と言われたが、確かにその通りであると思う。

書誌

使用底本 汲古書院本 六卷（生涯一片青山）大三冊 浅葱色表紙。題簽は単辺の摺題簽「行葦詩草

卷一生集
卷二涯集」（第一冊）。見返は黄色紙で「備前登々葦先生著／行葦詩草／清風閣藏版」。各巻に序、巻末に跋がある。

各集の扉に小題、挿絵があり、版式は雷文枠、竹簡文枠、波文枠等、装飾的で詩文集の趣を呈している。奥付は「文化十一年甲戌初春刻成」に続いて江戸須原屋茂兵衛以下京都河南儀兵衛まで五名の三都書林名がある。文化十一年刊本。類本まれなため、特に原寸で影印した。

諸本

一、国会図書館鶚軒文庫本 詩文341 六卷大三冊 浅葱色表紙。題簽は使用底本と同じ。見返は一行目が使用底本と異なり「武元登々葦先生著」となっている。書名、版元名は同じ。他は奥付に至るまで使用底本と同じ。

二、国会図書館本 190／35 六卷大一冊 元表紙がついた三冊を茶色の帝国図書館専用の表紙で合綴されている。

左肩に墨筆で打ちつけ書「行葦詩草 完」。第一冊見返は黄色紙使用で鶚軒文庫本と同じ。奥付はないが他は使用底本と同版。

三、都立中央図書館加賀文庫本 加賀11190 六卷大三冊 浅葱色表紙。題簽、見返、扉、奥付等、鶚軒文庫本と同じ。

卷六（山集）の序文の一部が破損している。

四、富士川英郎蔵本 生集大一冊 香色表紙。題簽はない。見返は黄色紙使用で使用底本と同じ。第一丁の扉は茶色刷で表は丸枠内に神社門前の風景。裏は小題「薇山吟月」とある。第二丁から田能村孝憲の序文三丁があり本文に続く。他は使用底本と同じ。裏表紙見返に行葦詩草六集の名が列記され両側に登登庵自身の作と思われる

る詩が記されている。飾り枠は茶色刷で二色套印の豪華本である。

稲川詩草

著者

山梨稲川（一七七一—一八二六）、名は治憲、字は玄度、叔子、東平、稲川などと号した。駿河国庵原郡西方村に生まる。狭山侯の儒臣陰山豊洲について学んだが、のち、本居宣長らが我が国の古音を論じたことなどに刺戟されて、音韻学の研究に志し、殊にその独創的な方法に基づいた『説文』の研究は、先人未踏のものであるという。江戸の著名な書誌学者松崎慊堂や狩谷棧斎と親交があり、晩年には自らもその著書を携えて、江戸に移り住んだが、まもなくして病を得て、歿した。享年五十六歳。著書には、『説文緯』『古声譜考』『孟浪俚言』『稲川詩草』その他多数ある。

内容その他

文政四年に駿府（静岡市）の書肆から出版され、全七巻から成り、古今体の詩を収めているが、編年体にはなっていない。

山梨稲川はその一生を真摯な学者として過し、当時のいわゆる詩壇とはかけ離れたところで詩作をし、また、詩人と言われていた人たちともほとんど交際がなかったため、彼の詩は江戸時代にはほとんど知られていなかったと言っている。稲川の詩を彼の死後に認めて、これを推称したのは、中国の清朝の鴻儒俞曲園であった。彼は光緒九年（明治十六年）に『東瀛詩選』を著し、その巻十五に稲川の詩を六十余首収録したが、その冒頭で、「元度（稲川）才藻富麗、気韻高邁、在東国詩人中当首屈一指、五七言古詩尤其所長、七律亦雄壯、而往往有不合律處、不能尽録、然其佳

句実不尽此」と言つて、稲川の詩を高く評価したのであった。それ以後、わが国の学者や詩人たちの間でも、次第に稲川の詩が認められるようになったが、次に内藤湖南の言葉を紹介しよう。

「先生（稲川）の詩は、兪曲園が申しましたやうに、非常にうまい。大体は陰山豊洲先生に就いて徂徠派の詩文をやられたのですが、余程洗鍊されて居るのであります。支那人の詩を鵜呑みにしたといふではないので、如何にも辞藻にも富まれ、いづれ支那のまねをした点はあるが、山梨先生の御自分のものになって居るのであります。……日本でもこんな一体えらい詩を作る人があつたかと、兪曲園が驚いて、日本で一番感心せられたのは山梨先生と広瀬旭荘とであります。山陽・星巖も相当にほめぬことはありませんが、一番ほめたのは広瀬旭荘と山梨先生とであります。旭荘は宋詩の派でありますが、山梨先生は純然たる唐の派の詩であります。この二人の詩のやうなのがあるので、日本人の詩が支那へ行つても輕蔑されぬだらうと思ひます」（内藤虎次郎「山梨稲川の学問」）。

書 誌

使用底本 故長澤規矩也先生藏本 七卷大五冊 木活字版（採撰亭）。茶色（渋引）表紙。題簽は各冊左肩に摺題簽「稲川詩草」。見返は黄色紙、四周单边で「稲川詩草／採撰亭活字板」見返の右上に魁の朱印押捺。文政四年の序文、附言がある。第五冊最終丁表に稲川玄度先生著述書目、裏に次の刊記がある。「文政四辛巳年初冬／駿府江川町／書林 採撰亭 鉄屋十兵衛 活版／劔刷 并書 玄玄亭 嶽下 李蹊」。56%縮小。

諸本

- 一、静嘉堂文庫本 90／36 七卷大五冊 茶色表紙。見返は黄色紙で、題簽から刊記に至るまで使用底本と同じ。
- 二、内閣文庫本 206／245 七卷大五冊 茶色表紙。第一冊は題簽が剝離、第四冊以外は右肩に昌平黌の「番外書冊」の黒印がある。使用底本と同板本。

三、慶応義塾図書館本 181/190 七卷大五冊 表紙、題簽、見返、刊記等使用底本と同じ。第二冊から第五冊の題簽は剝離。跋文はない。

四、国会図書館鵜軒文庫本(A) 詩文²⁴²³甲 茶色表紙。題簽は第一冊剝離、第二冊一部破損。跋文はない。他は使用底本と同板。一部虫損あり、朱点、朱引、墨筆による書入れがある。

五、国会図書館鵜軒文庫本(B) 詩文²⁴²³乙 茶色表紙。跋文はある。鵜軒文庫本(A)より本の状態も印面も良い。使用底本と同板。

柳湾漁唱

著者

館柳湾（一七六一—一八四四）、名は機、字は枢卿、通称を雄次郎と言い、柳湾、石香斎と号した。宝暦十二年に越後国新潟で生まれたが、父は廻船問屋小山安兵衛で、柳湾は父の実家をついで、館姓を名のったのであった。年少にして江戸に出て、亀田鵬斎に学んだが、やがて幕府郡代の属吏となって、飛驒の高山や羽前の金山などに祇役した。晩年は江戸の目白台に隠栖したが、「暇あれば則ち黄簾緑幕、書を読み、古を汲み、蕭間として、窮書生の如し」（松崎慊堂の言葉）というような、読書と詩賦を楽しみとする、悠々自適の境涯を送ったのであった。著書には『柳湾漁唱』のほか、漢文で書かれた歳時記とも言うべき『林園月令』がある。柳湾はまた、中唐や晩唐の詩を愛して、『中唐十家絶句』『中唐二十家絶句』『晚唐詩選』『晚唐十家絶句』『晚唐十二家絶句』『晚唐二十家絶句』等の多くの編著を残した。